

命題要素のモダリティ化 —「さっさと」を例に—

陳俊宏

（国立台湾大学・日本語日本文学研究所・院生）

日本語の文構造は、モダリティと命題に分けて考えることができるが、オノマトペは單なる客観的叙述内容、または補語の一種として用いられることがよく見られる。言い換えれば、オノマトペは命題要素として取り扱われることが多いと理解してよい。

ところが、次に挙げる例文（1）（2）はそれぞれ（1'）（2'）のように单なる命題要素ではなく、つまり、「そろそろ」や「さっさと」が単純に命題要素として働いているとは思えず、表現主体の主観的評価や感情的意味とも読み取れるようと思われる。

（1）（予定の時間が迫ってくる）

そろそろ報道センターへと向かいます。

（1'）そろそろ報道センターへと向かおう（独り言の場面）／向かいましょう。

（2）（チャイムが鳴った。先生が生徒に声をかけようとする）さっさと席につく。

（2'）さっさと席つけ。

つまり、（1'）と（2'）から、オノマトペにはモダリティを表す用法もあるのではないかと示唆していると考えられる。本稿では、この点について探ってみたい。